

埋葬に係る実践事例



推進校は、飼育動物が死亡した際、児童に生命の尊さを伝える取組を実施しています。また、学校担当獣医師から、遺体の検案、埋葬場所の準備、埋葬の処理などについて支援を受けています。



新宿区立東戸山小学校

【実践の概要】

○ 飼育する2頭のヤギのうち、9歳を迎えた親ヤギが10月に寿命を迎えました。死が近付くにつれて、餌の量が減ったり、倒れたりすることが増え、その様子に気づき、心配する児童も多くいました。飼育小屋を二つに仕切り、体を休めたり、自分のペースで餌を食べたりできるようにしました。ヤギの最期に当たっては、学校担当獣医師に確認をとりながら、児童にとっても、ヤギにとっても安心して安全な関わりがもてるように心掛けました。



立てなくなったヤギの世話

○ 新型コロナウイルス感染症対策下であることを踏まえ、お別れの集会などは行うことができませんでしたが、児童がメッセージを書いたり、代表児童が放送でお別れの言葉を読んだりしました。埋葬にむかうヤギに1年生が「ありがとう」「またあおうね」と声を掛けて見送りました。いつも当たり前のようだったヤギの死に直面し、生命の大切さを感じていました。



お別れの言葉を述べる代表児童

【学校担当獣医師や保護者等との連携】

- 定期的に行われる学校担当獣医師との授業の中でヤギの様子を見ていただき、「死が近いこと」を知らせていただいております、放送で児童に伝えるなど、ヤギの最期に備えた準備をすることができました。また、ヤギの様子を診察していただき、介護について助言をいただくことができました。

体温を保つために毛布を掛けることや、褥瘡（じょくそう床ずれ）を防ぐためにヤギの体の下に藁を敷くと良いことなどを具体的に教えていただき、適切な対応をとることができました。

- ヤギの最期が近いことを知らせると、これまで世話に協力していただいていたボランティアや保護者、卒業生など多くの方が、見舞いや別れの挨拶をしに来校され、本校にとってヤギがとても大切な存在であったことを実感しました。

【児童の反応】

- ヤギの大好きな葉を持ってきたり、水をあげたり、ブラッシングをしたり、掃除をしたりといったように、立てなくなったヤギのために何かできることはないかを考えて行動することができました。
- ヤギの最期を迎えて、継続的に飼育活動を行っている低学年児童や委員会の児童だけでなく、多くの児童がお別れのメッセージを書いたり、ヤギ小屋に訪れたりして、自分の思いを伝えようとしていました。どのメッセージにも、ヤギを大切に思う気持ちや感謝の気持ちが表されていました。



出棺を見送る 1年生児童

★★